

私も出逢えて良かった

二年生の夏、私は一人の患者さんに出逢いました。

受け持たせていただいた患者さん、Aさんは40歳代と若くおしゃべりが大好きで優しい男性でした。心疾患を多数患っており、今回は心不全の悪化が原因で入院していました。また、骨の先天性疾患も患っていました。清拭時、Aさんは、背中を拭いている私に「こんな骨の曲がった人みたことないでしょう。」「背骨が出ていて驚いたでしょう。」と笑顔を見せながら言いました。しかし私にはその笑顔が悲しい表情をしているようにも見えましたが、何と声をかけるのが良いのか分からず、「そんなことないですよ。」ということしかできませんでした。数日が経過し、援助や会話などを通じてAさんとの距離が近づいてきたと感じていた頃のことです。私がAさんの病室に伺うとAさんは「特別に良いものを見せてあげる。」と鞆の中から身体障害者手帳を取り出しました。Aさんが手帳を開いていくと一枚の写真が貼られていました。「これいいでしょう。良く撮れている。」と満足そうに見せてくれた写真は、笑顔ではなく、真剣な眼差しで凛々しい表情で写っていました。受け持ち最終日、Aさんは私に「こんな身体に生まれていなければ、もっと人の役に立てる人生だったろう。」と話されました。私は勇気を振り絞り「私はAさんから教えてもらったことがたくさんあります。Aさんの優しさにたくさん助けられました。だからAさんの人生に自信を持ってください。」と素直な気持ちを伝えました。知識もなく、援助も失敗してばかりで必死に勉強しても悔しい思いをしました。そんな時でも「ありがとう。」と優しく声を掛けてくれるAさんの姿がありました。Aさんにはどのような看護が必要なのか考えられていたのも、Aさんの想いを理解しようとする気持ちがあったからだと思います。学生の私がこんなこと言っているのだろうか躊躇いはありましたが、Aさんは涙を流しながら「あなたに出逢えて良かった」と言ってくださり、伝えることができ良かったと嬉しかったです。

三年生の冬に訪問看護の実習で、在宅で生活されているAさんにお会いすることができました。

卒業式の後、訪問看護の実習でAさんを担当されていた看護師さんに声を掛けていただきました。Aさんが実習で再会してから一か月後に心疾患が急変し、入院して数日後に亡くなられたとのことでした。突然のことに私は驚くばかりで看護師さんの言葉に相槌を打つことしかできませんでした。「遺影はご両親が身体障害者手帳の写真にされていました。笑顔の写真ではないけれど…」と話されたとき、Aさんが手帳を見せてくれた時のことを思い出し、「良かったです。」と一言返事をしました。それと同時にAさんとの時間が蘇ってきて涙が止まらなくなりました。

Aさんから教えてもらった思いや気づきを胸に、これからも多くの人に支えられていることと出逢いに感謝を忘れません。